

## 小山先生

藤澤 慶巳

小山先生と私は、専門分野も違い、それほど親しいわけではありませんでした。ご一緒に過ごした8年間の中で、数回ほど立ち話をし、お食事に行ったのも一度だけなのです。

それでも、小山先生の訃報を聞いたとき、私の目の前は真っ暗となり、頭の中は真っ白となりました。もう何も考えられない状態になってしまったのです。人間というのは、悲しいことや辛いことに直面すると、言葉を失くす生き物だという事実を再認識しました。言葉は生きていくうえでとても大切なもの。それほど大切なものが一瞬とはいえ、消えてしまうのです。

「言葉は大切なもの」と書きましたが、それを教えてくださったのは小山先生でした。実は、私は小山先生がお話しになる美しくかつ優しい日本語に恋をしていました。小山先生のお言葉はいつでも品位があり、表現力と音域がパーフェクトなのです（同じ学部の横井先生の音域も甲乙つけがたいほど素敵なのですが、その話は別の機会に）。

お食事をしたレストランのエレベーターの中で見ず知らずの人に対して小山先生がおっしゃった「何階でいらっしゃいますか？」という心地よい声は、今も私の耳に残っています。思い返せば、私はあのときから小山先生の日本語に魅了されていたのでしょう。

小山先生がお使いになる日本語表現は、海外で生まれ育った私にはとても斬新でした。特に、小山先生がお母様の話をされたときのお母様がおっしゃったという直接話法、例えば「お前が買ってきてくれた『救心』を飲んだらだいぶ具合がよくなったよ」というような、私が昭和の平岩弓枝氏のドラマの中でしか聞いたことのない表現でした。

また、私たちの研究室が同じ部屋にあったので、小山先生が他の先生や職員の方と会話をされているときや、電話でお話をされているとき、悪いとは思いましたが、私は先生の日本語に思わず耳を澄ませて聞き入ってしまいました。というのも、小山先生がお話になるときの音域ピッチも、私にとってはとても心地よいものだったからです。440ヘルツよりは少し低い“ラ”のフラットくらいで（職場に復帰されてからはもう少し低くなっていましたが）、バロック音楽の巨匠ヘンデルの優美な音楽のようでした。

そしてもう一つ、小山先生のこと忘れられないのは、そのお言葉と同じくらい優しさに満ちた心の持ち主だったということです。会うたびに満面の笑みで迎えてくれ、私の授業を見学したときのことや、私が卒業式でピアノ演奏したときのことをはっきりと覚えてくださっていて、まるで昨日のことのよう話してくださるのです。もちろん私だけではな

く、小山先生は他の先生方や生徒たちにもその優しさを惜しみなく分けてくださっていました。

小山先生亡き今、私にできることは、先生の美しい日本語と優しい心をずっと忘れないこと、そしてそれらの財産を多くの人たちに伝えることだと思っています。特に小山先生

の美しい日本語については、何年かかるかはわかりませんが、私も必ず習得したいと願っています。そうすることによって、私の、小山先生の美しい日本語への恋が成就するのだと思うのです。

小山先生。大変お世話になり、本当にありがとうございました。どうぞ安らかにお眠りください。